ホテルの客室の抽斗には、必ず聖書が入ってるの。夜に朝にクリスチャンは聖書を開き、神様に祈るから。それくらい聖書はメジャーなものなのよ、と母はマスカラを塗りながら言った。その夜、私は母と博多のホテルに宿泊していた。母がネットで知り合ったという恋人に会うためだった。

もうじき彼が来るから、あなた好きに遊んでらっしゃい。初めての街で、高校生の私は放り出された。まだスマホもない、ｉモードの時代。しかも夜。どこに何があるのかもわからない。ご機嫌な母とは裏腹に、私はこの後起きる事態を暗澹たる気持ちで予測しつつ、思った。ここは九州。誰も私のことを知らない。このまま吉野ケ里遺跡を見に行って、逃げてしまいたい、と思った。吉野ケ里の後は、長崎で中華街に遊ぶ。その後は、その後はどうしよう。そのまま母のもとに戻らず、消えてしまうのはどうだろう。

ぼんやり考えたものの、私には行動力も資金もない。匂いに誘われるがままホテルからほど近い屋台に座り、勇気を出してとんこつラーメンを頼んだ。出てきたラーメンは、何を食べるか迷うことに罪悪感を抱くような私でも、とてもおいしい、と素直に思えた。食べ終わる頃、電話が鳴った。出ると、咽び泣く母の声が聞こえた。今日は結末まで早かったな。私は急いで客室に戻った。

重いドアを押し開けると、母がこの世の一切を憎むかのような形相で、涙を流し、車椅子に座っていた。せっかく着た豪華なレースの下着も、時間をかけた化粧も、意味を失っていた。恋人が来たのか来なかったのか、私は聞かなかった。

「あんたのせいで」母が絞り出すように言った。「あんたさえ生んでなければ。あんたさえ、いなければ」

　母の呪詛は聞き慣れている。なにか悪いことが起きれば、いつも私のせいになる。

「ごめんね」

　ごめんね、生まれてきてしまって。心の底から原罪を詫び、母のしてほしいことをする。痙攣する下肢をさすり、60キロの体躯をなめらかにベッドへ移す。泣きたいだけ泣けるようにクッションをかき集め、母の背中に押し当てる。抽斗からは聖書を出す。

『空の空、一切は空』

　私は伝道者の書を朗読する。『曲がったものは、まっすぐにすることができない、欠けたものは数えることができない』

母はおんおん泣いている。求めても求めても、彼女は男に愛されない。

　私は母がうまく、そして早く死ねるようにと願った。恋には奔放で、離婚する程度には自由で、それでいて自殺できない程度には敬虔なクリスチャンである彼女の、深い絶望と悲しみは、死によってしか救われないとほとんど確信すらしていた。

「今度は、普通に来ようよ。博多。ラーメン、おいしいよ」

　恐る恐る母の背をさする。母は私を振り払う。

「だいっきらい」

　空の空。一切は空。ホテルに泊まり抽斗に触れるたびに、思い出される母の記憶。